

ケインズの方法的態度と経済学

鈴木芳徳

今日は、経済学と私という大きなテーマでお話するわけですが、私の研究回顧談、とでもいうことになろうかと思えます。

私自身は、今でこそ金融・証券論を専門にしており、その方面の学会のお世話などしてまいりましたが、実は出身は経済学説史の畑であります。普通、経済学説史といいますと、価値論とか、蓄積論とかいう内容になる訳ですが、証券市場や金融分野についての学説というのは、それほど広く研究されているわけではありません。従いまして、私の仕事は、経済学説史の手法を使いながら、金融・証券分野の研究を進めるところに特徴があると思っております。言い換えると、学説史と金融・証券論とのクロスしたところを綴る、ということになります。

学説とか思想とかいうものを取り扱うことの利点は、そのことを通じて、自分自身の座標軸の精度を上げてゆくことができる、という点にあります。ここで座標軸といいますのは、世界観・歴史観・社会観・人間観の総体であります。そういったものの精度を高める喜び、ここに学説史・思想史を学ぶことの意義があります。単にこういう学説がある、ああいう学説もある、というだけでしたら、単なるお話に過ぎません。自分がいない学説研究というのは無意味・無概念であります。

今日は、そうした学説の一つとして、ジョン・メイナード・ケインズの経済学説を取り上げます。

学説史の中で、「アダム・スミス問題」と一般に呼ばれている問題があります。これは、スミスのモラル・センチメントとウエルス・オブ・ネイションズとは、連続しているのか、それとも断絶しているのか、という問題であります。これと似たものが「メイナード・ケインズ問題」と呼ばれるものでありまして、1920年代の前後で、ケインズの方法的態度に変化があったのか、それとも連続していて不変であったのか、という問題提起であります。これについては、欧米で実に沢山の文献が発表されておりまして、最近もこの問題を取り扱った書物が続々と刊行されております。

1928年、ケインズは、「若き日の信条」という文章を公表します。この「マイ・アーリー・ビリーフス」は、ケインズが、若き日の自分自身のものの考え方は間違っていた、といういわば痛烈な自己批判の文章です。つまり、ケインズの方法的態度は、この1928年の前と後とでは、決

定的に違う、そのことを自分自身が表明しているのです。私自身の感想を一言付け加えますと、それより以前に発表された「貨幣論」や「貨幣改革論」は、よく整理されていて、よく分かる、しかしあまり面白くないのです。ところが、1929年より後に発表された「一般理論」という彼の主著は、分かりにくいこと、この上ないのだが、面白いのです。では、1929年に、何が、どのように変わったのでしょうか。どういう意味での転換であり、どういう内容の屈折が起こったのでしょうか。ここが大問題なのです。

最初のころのケインズは、分析哲学という立場に身を置いていました。この立場は、ムーアからバートランド・ラッセルに至る流れ、或いはポPPERの立場です。それは、人間というものを全知全能のものと考え、人間の本性を合理性で捉え、ひとは自分の目の前にある課題は自分自身で解けるものである、と考えていました。私も全知的であり、他者もまたそれぞれにみな、全知的である、と考えていたのです。

しかし、この1929年の屈折点を過ぎたケインズは、人間というものは全知的でもなんでもない、人間というものがあたかも全知全能であるかに考えていたかつての自分は間違っていた、あれは自分のミスアンダースタANDINGだった、と明言するのです。

私たちは、かつてのデカルトの「主観—客観」図式を、ここで思い出すことができます。デカルトの場合には、存在するのは、ただ一人の「われ」だけです。人が10人居たとしても、それはただ一人の「われ」が10個並列しているだけのことなのです。前期ケインズにおける分析哲学の立場は、まさにこれでした。それは、ヘーゲル流の考え方を、はっきりと拒絶するものでした。

しかし、ヘーゲルの場合には、「われ」相互の間の承認が問題になります。自己意識をもつ他人と関わる、自己意識をもつ自己、こういう捉え方の中には、社会生活を営む「われ」というものが見えているのです。お互いに交錯しながら社会生活を営む「われ」、こういう観点が重要とされるのです。この考え方は、フッサールら現象学の人々が、インターサブジェクティブィ、すなわち「間主観性」と呼んだものと極めて近いものだと思います。

こうした方法的態度の意味するものは、例えばいわゆる「美人投票論」の議論において如実に現れてきます。美人投票とここでいうのは、例えば向こう側に10人の女性がいて、皆で投票する、その結果、最高点を獲得した女性に投票した人には、車一台の賞品が出る、といったものです。この場合、問題は、自分以外の人々が、いったい誰に投票するかであります。だから、この場合には、どんなに虚ろな、或いはどんなに恣意的なものであるにしても、自分以外の投票者がどう動くか、これを予想し、これを参照し、これに依存せざるを得ないのです。だから、その女性を美人であると平均的な人々が考える、と平均的な人々が考える、こうしたことの累積であり、従って無限級数的に事実からは乖離する可能性がある、つまり、ここでは、不確実性と慣行とが対になっています。

こうした現象が意味するものを考えてみましょう。

第一に、そこでは、時間というものが、歴史的に不可逆的な時間として捉えられています。数学や物理学の一部で想定するような、自己回帰的な時間ではありません。常に、その場その場で、賭けるしかなく、選択をやり直すことは許されない、そういう不確実性の中で、常に決断を強いられるのです。

第二に、個々の主体と社会との関係からみても、個々の主体が相互依存的に行動するところから生じてくる不確実性があります。それは、他者依存性ということもできましようし、それがどんなに虚ろなものであるにしても、つまり言い換えるなら、どんなに「かのような」もの、「アズ・イフ」なものであるにしても、そうした根拠なき合理性に身を委ねざるを得ない、そういうものとして現実の人間行動というものを考えざるをえないのです。

今、「かのように」という言葉を使いましたが、これはかつて、ハンス・ファイヒンガーが1924年に「アズ・イフの哲学」という本を出版し、幸徳秋水との関連で森鷗外が小さなものを書いている、あのアズ・イフです。

以上、お話してまいりましたように、ケインズの考え方は、その前期と後期とでは、かなり違ってきているのです。そして、その後期に属する「一般理論」が面白いのは、そこに「期待の相互依存性」が語られているからであり、さらにその底には、社会の不条理性と、更には、人間というものの不条理性が潜んでいるからにほかなりません。

しかし、それにしても、何故、ケインズの考え方がそうまで変化したのでしょうか。これは実際のところは分からないのです。一方では、彼の個人生活における変化のせいだ、ということが出来るのかもしれませんが。結婚や官庁関係の職務経験などなど、そうしたことが現実社会というもの、そして必ずしも合理的には行動しない人間というものに目を開かせたのでしょうか。しかし、他方、もっと深いところで思想的な変化があったとすると、ケインズが終生その庇護者であり続けた、ヴィトゲンシュタインとの関連が問われるべきでしょう。今、ヴィトゲンシュタインの本を開いてみると、例えばこんな言葉があります。すなわち、「われわれの文化的状況とは別の或る状況においては、貨幣制度もまた存在しない」というのです。これは驚くほどマルクスのいうところに近接しています。このヴィトゲンシュタインの思想は、その前期と後期とで大きな違いがある、とされています。先の引用は後期に属するものです。すなわち、前期におけるヴィトゲンシュタインは、「私だけの言語」を問題にしていたのですが、後期に入るとむしろ「社会的言語」に関心が移動します。この変化が、友人であるケインズに影響しないはずはない、のです。では、何故、ヴィトゲンシュタインの考え方に変化が生じたのでしょうか。恐らくは、当時、ケンブリッジに来ていたピエロ・スラッフアの影響ではないか、という推測をする人があります。そうであるとする、と、いってみれば、とんでもない話のようですが、どこかでヘーゲルからマルクスへの流れがケインズに流入しているのかもしれませんが。この辺りを追跡した論文や書物が欧米では沢山、でていいます。

さて、こうしてケインズについていろいろ面倒なことをお話してまいりましたが、ケインズの考え方を、うんと単純化していうと、「将来への見通しが現在を規定する」と表現することができます。これは、それまでの古典学派が「過去が現在を規定する」と捉えてきた伝統からすると、全く違った発想に立っているのです。将来見通しを考えるときには、将来への不確実性がまず問われてきます。そして、このケインズの考え方の中にある「時間」が歴史的に不可逆的な時間である、ということも明らかです。円環回帰的な時間ではない、だからアンサーティンティ、すなわち不確実性が問題になるのです。そもそも不確実性には二つあって、第一のものは、袋の中に赤い球7個と白い球が3個入っているときに赤い球が取り出される確率はどれほどのものか、といった種類の不確実性です。第二のものは、第三次世界戦争は起こるかどうか、といったものです。この後者のことを「真の不確実性」或いは「測定不能な真のリスク」と呼びますが、この後者は、歴史的時間を問題にするのでない限り、認識されることのない不確実性です。

こうした意味からすると、ケインズが1921年に発表した「確率論」というプロバビリティに関する大きな書物が注目されるのですが、この本は、未だに日本では翻訳がでない、いわくつきの難しい本です。この本の中でケインズは、大陸における確率論の歴史を網羅的に検討しているのです。つまり、ここで私の言いたいことはこうなのです。これまでも、ケインズ思想について、或いはその思想的方法の変化について、多くのことが日本でも語られてきているのですが、ともすると、ケンブリッジ学派の中でのこととして処理されてきたきらいがあります。しかしそれは間違いであって、ヨーロッパ思想の深い、そして幅の広い流れの中でケインズを検討すべきなのです。当のケインズにしてみれば、狭いケンブリッジ学派の枠の中でのみ検討される、というのでは恐らくは不本意であるにちがひありません。このことは、日本におけるマルクスの扱いについても似たことがいえるのでして、日本の場合、マルクスがロシア経由で入ってきたがために、とかくボルシェビキ・メンシェビキの問題と絡めて捉えられてきた、マルクスがヨーロッパ思想の流れの中で捉えられるようになったのは、ごく最近のことのように思えてならないのです。これはマルクス自身にとっては、極めて不本意なことであるのではないかと、秘かに考えております。

さて、先に申し上げましたように、分析哲学においては歴史というものが抜け落ちるのです。そのことは超歴史的な、その意味で普遍的な認識に立つものです。しかし、歴史というのは、普遍性と特殊性との相克です。歴史的な事象の一回性、或いは個別性、これをどう取り扱うか、これは学問的客観性と実践的主観性にかかわる問題です。客観的でなければ学問でないが、しかし主観的でなければ実践には結びつかない、この問題こそは私たちの学問への姿勢を問いかける問題だ、ということだけを申し上げて、今日のお話を終わりに致したいと思います。

最後までご清聴いただきまして有難うございました。